

市場で評価される
和牛子牛づくり

昨年5月以降、和牛子牛価格が低迷しています。低調な枝肉消費飼料や資材価格の高騰などの要因が重なり、肥育農家の導入意欲は依然として低いままです。

そのような状況でも市場で評価される牛づくりのためには、より高い増体が求められます。市場ではDGや腹囲が大きく、かつ体高が高い牛が、評価されています。具体的には、十勝和牛マニユアル牛の標準値と比較し、体重は約15〜20%増加、体高は約4%増加、腹囲は190cm以上が目安になりそうです。

1 哺育期の骨格作り

図1に和牛子牛の体高発育パターンを示しました。和牛の体高はその大半が出生後3〜4か月で決まります。とりわけ哺乳期(出生〜約4か月齢)に骨格形成のため蛋白質(CP)を十分給与することは極めて重要です。

近年は哺育期のCP充足を重視し、前提条件を整えた上で高栄養哺乳プログラムを採用する農場が増えています。導入にあたっては、除

糞頻度を確保し常に乾燥した牛床を維持すること。敷料をたっぷり投入し、環境からのエネルギーロスを低減することがあります。また高栄養哺乳プログラムでは、哺育後期に急激にスターターを多量摂取させ

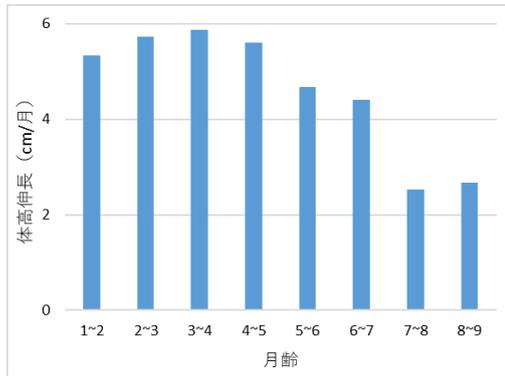


図1 体高の発育パターン (去勢27頭、雌28頭) (2013,肉牛大辞典)

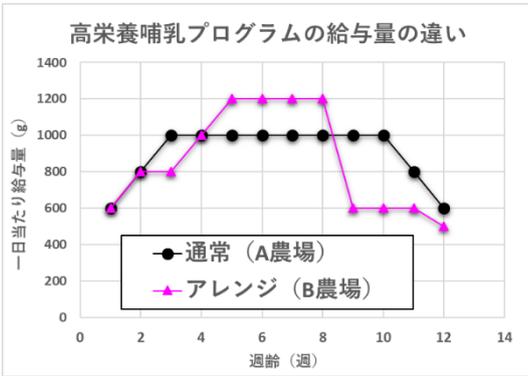


図2 高栄養哺乳プログラムの給与量 (CP28のミルクを使用)

2 高栄養哺乳プログラムをアレンジする

これらの前提条件を整え、高栄養哺乳プログラムをアレンジすることで子牛の増体を飛躍的に増加できます(図2)。

この方法では、体高発育のピーク付近で一日あたり最大1200gのミルクを給餌します。その後、通常よりも早めにミルクを減らし、その分、スターターを飽食させることでCPを充足させます。離乳時までに2.5〜3.0kg/日のスターターを食べられるようにすることが目標です。ミルクの総給与量は、通常より一頭あたり約3.5kgも少なくなります。

通常の高栄養哺乳を行うA農場と、アレンジを加えたB農場で発育状態の比較をおこないました(図2)。明らかに体重と体高がA農場よりB農場で大きくなっています。また肋張りを示す腹囲もB農場は大きくなりました。このことは日本飼養標準肉用牛(2022)のCP

要求量に対するミルクからのCP供給量からも分かります(表1)。B農場では、スターターを十分食べられない哺乳前期にほとんどミルクからのCPで確実にその要求量を満たすことができました。

高栄養哺乳のアレンジで増体が改善できる場合があります。ご質問があれば、お気軽に普及センター、JAまでご相談ください。

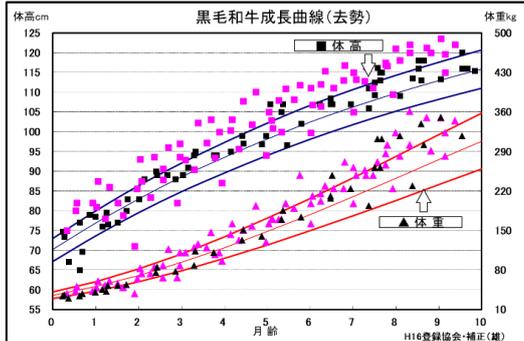


図3 発育状態の比較 (A農場:黒、B農場:ピンク)

表1 CPの要求量とミルクからの供給量

週齢	目標体重 (kg)	代用乳からの1日あたりのCP量 (g)		
		要求量	通常	アレンジ
1	33	140	168	168
2	36	214	224	224
3	41	292	280	224
4	48	259	280	280
5	54	308	280	336
6	60	311	280	336
7	66	268	280	336
8	71	317	280	336
9	77	331	280	168
10	83	378	224	168
11	90	338	168	140
12	96	294	168	140
ミルクの総給与量 (kg/頭)			75.6	72.1

※赤字は要求量より上回って供給しているCP量